

# 医療タイムス

週刊医療界レポート

2013.5/13 No.2108

特集

## あの日から、未来へ 南相馬市立総合病院の<sup>いま</sup>現在



### タイムスインタビュー

療養の時期を明確にすれば  
満足のいく在宅介護は実現する

介護相談サロン・ソワニエグラン代表

宮崎詩子氏

### タイムスレポート

これからの福祉と医療を实践する会第372回例会  
地域医療・福祉をどう連携させるか  
若竹大寿会の3つのプロジェクト

### Top News

国民会議に不満相次ぐ 社保審・介護保険部会  
「DPC病院Ⅲ群、現状を維持すべき」が大勢 DPC評価分科会

## 冬の時代の診療所経営

### 被災地に今からできる5つの支援



医療法人社団裕和会理事長  
長尾クリニック(尼崎市)院長 **長尾 和宏**

1958年香川県生まれ。東京医科大学卒業、医学博士、日本慢性期医療協会理事、日本尊厳死協会副理事長、関西国際大学客員教授、近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」「平穏死という親孝行」など。  
クリニックHP <http://www.nagaoclinic.or.jp>  
長尾和宏オフィシャルサイト <http://www.dr.nagao.com/index.html>

2年前のGWは、被災3県を転々としていました。震災から49日目の被災地は、大けがにたとえたら急性期から亜急性期への移行期でした。行く先々で地域の人たちといろいろな話をしましたが、自分たちに起こっていることにまだ実感がないうでした。あの日、黙々と後片づけをしていた人たちは今、何を思っているのでしょうか？ 現在は、医療にたとえたらまさに「慢性期医療」です。被災地の医療は、日本の慢性期医療の縮図であり、近未来そのもの。石巻に入職された先生方から断片的ですが継続的に情報を得ています。また福島県相馬市とは、震災を契機に特別なご縁を頂戴しています。

しかし何もなかったかのようににぎわう神戸や大阪にいと2年前のことを、ついつい忘れてしまいそうになります。しかし私たちも18年前に、同じような辛い体験をしました。もう忘れてしまった人もいれば、いまだにPTSDで苦しんでいる人もいます。喪失体験は一生癒えないことを、知っています。また私の地元である尼崎市では、8年前の4月25日にJR福知山線の脱線事故が起き、多くの命が奪われました。そのトラウマに苦しむ人たちが私の身近におられ、喪失体験の重さを噛みしめているところ です。

遠くに暮らす私たちが今後、被災地にできることを5つ考えてみました。(1)被災地の方と接すること。地元の医療者や行政の方を講演会などでお招きして、今だから言える教訓を共有する。市民も一緒に参加しましょう(2)ふるさと納税を継続すること。これは簡単にできます。被災自治体への寄付は所得控除ではなく、税額控除として扱われることはあまり知られていません。どこの自治体でもいいです。テレビで見たいと思う自治体のホームページを開けてみま

しょう。自治体への寄付=ふるさと納税です。「私は被災地のことを忘れてはけませんよ」というメッセージを送ることができます(3)被災地に旅行しよう。私は何度か被災地をめぐるしました。当たり前のことですが、見ると聞くでは大違い。今からでも遅くはありません。気候に恵まれるこれからの季節、旅行者として被災地をめぐるましょう。経済効果に寄与できます。被災地でお金を使うことは、素晴らしい支援だと思います(4)被災地の友人、知人に手紙を書こう。自分自身の経験を振り返っても、この時期の便りは嬉しいものです(5)被災地の野菜や海産物をネットで買おう。便利な時代に生きています。おいしい野菜や海産物をネットで買って食べることは、被災地の農業や漁業の復興に大きな励みになるはず です。

以上、思いつくままに書いてみました。全て医療者でなくても誰でもできることです。加えて現地で頑張っている医療者の本を買って、抄読会を開くこともいいでしょう。「在宅医療から石巻の復興に挑んだ731日」(武藤真祐監修)と、「復興は現場から動き出す」(上昌広著)が超お勧めです。被災地の慢性期医療に学ぶことは、日本の慢性期医療の大きなヒントになります。20~30年というスパンで見ると、闘いはまだ始まったばかり。「これまで1度も被災地と関わらなかった」という医療者にこそ、「これからが定番ですよ」と呼びかけたい気持ちです。